

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 11

国立公文書館	
分類	
	返 赤
配架番号	3 A
	14
	70-11

本土作戰記録（防衛總軍）

~~〇〇〇〇~~

昭和二十一年十一月  
第一復員局

国立公文書館	
分類	
配架番号	70-11

本記録ハ元防衛總司令部參謀

陸軍少將 加藤 義 秀

陸軍中佐 西岡 繁

同 島谷 武

同 一宮 義 清

同 少佐 緒方 義 人

カ共同シテ其ノ記憶ヲ回想シテ作製セシモノナリ

本土作戦記録（防衛總軍）資料出所一覽表

頁	項目	資料出所
P 1 P13	第一章 作戰指導 主要内容 真土防衛作戰要綱ノ趣旨 捷三號作戰準備要綱要旨	加藤大佐竝ニ 西岡中佐ノ記憶
P14 P20	第一章 作戰指導 目 第四 至 第十一 (P20 / 末行) (P13 / 末行)	島谷中佐ノ記憶
P21 P28	第二章 防空作戰 目 第一 至 第三 (P28 / ) (P31 / )	西岡中佐ノ記憶
P26 P44	第二章 防空作戰 目 第四 至 第十 別表第一 (P44 / ) (P28 / )	島谷中佐ノ記憶
P41	第二章 防空作戰 第九ノ(4) 別表第二 (P41 / )	一言少佐ノ記憶
P47 P52	第三章 沿岸防禦 全章(表ヲ含ム)	緒方中佐ノ記憶
P54 P55	第四章 海軍及隣接 各軍トノ關係	西岡中佐竝ニ 島谷中佐ノ記憶
P55 P57	第五章 警 備	加藤大佐ノ記憶

裏面白紙

目次

- 第一章 作戰指導
- 第二章 防空作戰
- 第三章 沿岸防禦
- 第四章 海軍及隣接各軍下ノ關係
- 第五章 誓備

本土作戰記錄（防衛總軍）

第一章 作戰指導

一、防衛總司令部ハ昭和十六年七月十二日編成ヲ完結ス  
防衛總司令官ハ防衛總司令部令ノ規定スル所ニ隨ヒ防衛ニ關シ東部  
中部、西部、北部、朝鮮及臺灣各軍司令官ヲ指揮シアリシガ昭和十  
七年四月米艦隊航空部隊ニ依リ内地ヲ空襲セラレタル後新ニ第一航  
空軍編成セラレ之ヲモ防衛ニ關シ指揮スルコトナレリ昭和十八年  
二月ニハ北部軍、昭和十九年三月ニハ臺灣軍ニ對スル防衛指揮權ヲ  
解カレ沖繩諸島（新ニ<sup>32A</sup>編成サル）ヲ防衛總司令官ノ防衛擔任地域  
ヨリ除カル次イデ「サイパン」ノ失陷ニ伴ヒ内地防衛ノ強化ヲ必要  
トスルニ及ビ昭和十九年五月東部、中部及西部（<sup>32A</sup>ヲ含ム）各軍ニ  
對スル完全統帥ヲ認メラレ（朝鮮軍及第一航空軍ヲ防衛ニ關シ指揮  
スルコト故ノ如シ）其ノ統帥上ノ權限ハ一段ト強化セラレタルモ總  
司令部ニ兵器、經理、衛生等ノ各部ヲ有セサル爲作戰指揮ヲ除ク

政的事項ハ依然各軍獨立ノ形体ヲ保持シ又兵力ノ移動、陣地ノ構築  
等ニ就キテハ細部ニ至ル迄參謀總長ノ認可ヲ要セリ此ノ頃沖繩ニ在  
ル第三十二軍ハ西部軍司令官ノ轄下ニ入り隨テ沖繩ハ再ビ防衛擔任  
地域ニ入レリ

二、防衛總司令官ハ大平洋戰爭遂行上本土防空極メテ緊要ナルニ鑑ミ特  
ニ防空ヲ重視シテ屢々防空訓練ヲ實施スルト共ニ之ニ關スル戦法ヲ  
創意シテ兵力ノ不足、施設ノ不備ヲ補フニ努メ他面中央部ニ對シ防  
空兵力ノ増強、施設ノ強化等ニ關シ屢々具申スル所アリタルモ其ノ  
實現ハ諸般ノ關係上遠々タルノ止ムヲ得サル状態ナリ又沿岸防禦ハ  
當初海軍ニ信賴シ敵ノ海上小部隊特ニ敵潜水艦ノ艦砲射撃ニ對シ重  
要地點ヲ掩護シ得ル程度ニ止メアリシカ昭和十九年五月「サイパン」  
ノ失陥後米軍ノ日本本土ニ對スル空襲漸ク激化セントシ其ノ本格的  
上陸作戰亦可能ト判斷セラレ且本土防衛ニ使用シ得ル兵力モ逐次増  
強セラレタルヲ以テ中央ヨリ新ニ命セラレタル本土防衛任務ニ基キ

皇土防衛作戰要綱ヲ立案之ヲ各軍ニ示達シ作戰準備並ニ實施ノ憑據  
タラシメタリ其ノ要旨左ノ如シ

皇土防衛作戰要綱ノ要旨

第一 防衛作戰方針

一、海軍ト協同シ敵ノ侵襲ヲ假推シ皇土ノ防衛ヲ完ウス

第二 防衛作戰要領

二、敵ノ空襲破推ヲ防衛ノ第一義トシ航空ニ重點ヲ置キ速カニ防空作  
戰準備ヲ完整スルト共ニ先ツ離島等ノ戰備ヲ強化シ敵ノ奇襲攻撃  
ニ備ヘツツ成ルヘク速カニ本土要域ニ於ケル邀撃態勢ヲ整ヘ敵ノ  
侵襲ニ方リテハ極ヲ失セス空地ノ戦力就中航空戦力ヲ極度ニ集中  
發揮シテ之ヲ擊推ス

三、東部、中部、西部及朝鮮各區ハ夫々其ノ防衛擔任地域ノ作戰ヲ擔  
任ス而シテ敵ノ侵襲ニ方リテハ斷乎各戦力ノ集中ヲ圖ル

四、第一航空軍ハ海軍ト密ニ協同シ敵艦船特ニ輸送船ヲ求メテ之ヲ洋

上ニ擊滅ス

五 作戰ニ方リテハ海軍敵ニ隣接各軍ト密ニ協同ス

第三 防空作戰

六 空地ノ防空戦力ヲ徹底的ニ集中シテ來襲敵機ヲ擊墜シ以テ重要ナル國力増強關係施設ヲ掩護ス之ヲ爲航空部隊及高射部隊ハ特ニ戰鬥空域ヲ設クルコトナク同一空域ニ於テモ夫々其ノ特性ニ應ジ戰鬥ヲ實施ス

而シテ航空部隊ニ在リテハ防禦ノ兵力ヲ以テ要地ヲ直接掩護スルト共ニ爾餘ノ兵力ヲ以テ成ル可ク遠ク敵ヲ捕捉シテ之ヲ擊墜スルニ勉ム追撃ニ方リテハ其ノ作戰地域ニ拘ラズ執拗ニ追撃ヲ敢行シ生還敵機ノ擊破ヲ期ス

七 東部軍ハ皇居ヲ姦メ主トシテ京濱地區ニ於ケル戰政略及生産中樞ヲ掩護ス又立川、太田、常陸、釜石等ニ一部ノ兵力ヲ配置シテ當該地域ニ在ル生産施設ヲ掩護ス

京濱地區掩護ノ爲戰鬥二十戰隊ヲ收容シ得ル如ク飛行場ヲ準備ス電波警戒網ヲ推進スル爲八丈島警戒機ニ連接シ距岸三百軒附近ノ洋上ニ電波警戒機ヲ搭載セル船舶二隻ヲ配置シ得ル如ク準備ス八 中部軍ハ主トシテ名古屋、阪神地區ニ於ケル重要生産施設ヲ掩護ス又廣島、濱松、清水、廣畑、京都等ニ一部ノ兵力ヲ配置シテ當該地域ニ在ル生産施設ヲ掩護ス名古屋地區掩護ノ爲戰鬥五戰隊、阪神地區掩護ノ爲戰鬥五戰隊ヲ收容シ得ル如ク飛行場ヲ準備ス電波警戒網ヲ推進スル爲八丈島警戒機ニ連接シ距岸三百軒附近ノ洋上ニ電波警戒機ヲ搭載セル船舶一隻ヲ配置シ得ル如ク準備ス九 西部軍ハ主トシテ倉幡地區（關門ヲ含ム）ニ於ケル重要生産施設ヲ掩護ス又長崎、福岡、大卒田等ニ一部ノ兵力ヲ配置シテ當該地域ニ於ケル生産施設ヲ掩護ス倉幡地區掩護ノ爲戰鬥十戰隊ヲ收容シ得ル如ク飛行場ヲ準備ス



七 朝鮮軍ハ主トシテ釜山、京城地區ニ於ケル軍事關係施設ヲ掩護ス又平壤、水豊等ニ一部  
ノ兵力ヲ配置シテ其ノ生産施設ヲ掩護ス釜山地區掩護ノ爲戰闘二戰隊、京城地區掩護ノ  
爲戰闘二戰隊ヲ收容シ得ル如ク準備ス

其第一航空軍ハ敵機動部隊ノ來襲ニ方リテハ第五飛行團等ヲ併セ指  
揮シ海軍ト密ニ協同シテ敵ノ航空母艦ヲ求メテ之ヲ擊滅ス

#### 第四 沿岸防禦作戰

其遠カニ離島竝ニ本土要域ニ於ケル戦備ヲ強化シ敵ノ侵攻ニ方リテ  
ハ機ヲ失セズ空地ノ戦力就中航空戦力ヲ極度ニ集中發揮シテ之ヲ  
洋上ニ擊滅ス

其東部軍ハ先ツ速カニ伊豆諸島ノ戦備ヲ強化シ次デ八戸平地、仙臺  
平地、水戸平地、房總半島、相模平地附近要域ニ於ケル戦備ヲ強  
化シテ邀撃態勢ヲ整ヘ敵ノ侵攻ニ方リテハ機ヲ失セズ之ヲ水際附  
近ニ擊滅ス伊豆諸島、八戸平地、房總地區ニ集點ヲ置ク  
其中部軍ハ濱松平地、豊橋平地、紀伊半島、高地平地附近要域ニ於  
ケル戦備ヲ強化シテ邀撃態勢ヲ整ヘ敵ノ侵攻ニ方リテハ機ヲ失セ

ス之ヲ水際附近ニ擊滅ス濱松平地ニ重點ヲ置ク隨時一師團ヲ他  
轉用シ得ル如ク準備ス

其西部軍ハ先ツ速カニ南西諸島ノ戦備ヲ強化シ次テ種子島、宮崎平  
地、鹿野平地、薩摩半島附近要域ニ於ケル戦備ヲ強化シテ邀撃態  
勢ヲ整ヘ敵ノ侵攻ニ方リテハ機ヲ失セズ之ヲ水際附近ニ擊滅ス南  
西諸島、宮崎平地ニ重點ヲ置ク南西諸島ニ敵侵攻セバ一師團(馬  
匹ヲ除ク)ヲ増援シ得ル如ク準備ス

其朝鮮軍ハ離島竝ニ元山以北ニ於ケル日本海沿岸地域ニ於ケル戦備  
ヲ強化ス

朝鮮ヲ縱貫スル主要交通線ノ掩護ニ遺憾ナカラシム

其第一航空軍ハ所要ノ作戰準備ヲ實施シ敵ノ侵攻ニ方リテハ海軍ト  
密ニ協同シ主トシテ敵ノ輸送船ヲ求メテ之ヲ洋上ニ擊滅ス

#### 第五 警備

其軍事行動ノ掩護及防諜等ニ支障ナカラシムル如ク適時所要ノ警備

三、昭和十九年七月大本營ヨリ捷三號作戰（比島方面決戦ヲ捷一號、連絡圏域方面決戦ヲ捷二號、本土（北海道ヲ除ク）方面決戦ヲ捷三號、北東方面決戦ヲ捷四號、作戰ト稱ス）準備要綱ヲ指示セラレ作戰準備ヲ命セラレタルヲ以テ各軍ニ對シ左ノ捷三號作戰準備要綱ニ基キ作戰ヲ準備スヘキヲ命ス

捷三號作戰準備要綱要旨

第一 作戰名稱

- 一、捷三號作戰ヲ更ニ左ノ如ク區分ス
  - 八戸附近ノ決戦 捷三號ノ甲作戰
  - 仙臺附近ノ決戦 捷三號ノ乙作戰
  - 關東平地ノ決戦 捷三號ノ丙作戰
  - 濱松平地附近ノ決戦 捷三號ノ丁作戰
  - 北九州ノ決戦 捷三號ノ戊作戰

第二 方針

一、陸、海、空ノ各種戦力ヲ統合發揮シテ成ルヘク敵ヲ洋上就中泊地ニ於テ之ヲ擊滅シ得ル如ク準備ス

第三 航空作戰

一、敵ノ來攻ニ方リテハ速カニ航空戦力ヲ所要地域ニ徹底的ニ集中シ海軍ト密ニ協力シテ敵艦船等ニ激撃送船ヲ洋上就中泊地ニ於テ之ヲ擊滅シ得ル如ク準備ス

二、作戰準備ハ概ネ十月末迄ニ之ヲ完成ス

三、決戦時以前ニ於ケル航空作戰ハ兵力ヲ努メテ縱深ニ配備シ主動的ニシテ柔軟ナル作戰（戰術）指導ニ徹シ以テ敵戦力ノ擊破ヲ圖リ我が戦力ノ漸進ヲ防止スルヲ本旨トス之カ爲テニ敵基地ニ對スル短切ナル奇襲攻撃及檢略ニ當リ遠撃ヲ重視シ基地ノ直接防空等ハ地上砲火ニ依ルヲ主トス

四、敵ノ渡洋進攻部隊ニ對スル航空決戦ハ一部ノ奇襲兵力ヲ以テ敵空

母ノ漸減ヲ策スルト共ニ敵ヲシテ爲シ得ル限り我が基地ニ近接セシメタル後全兵ヲ投入シテ晝夜ニ直リ果敢執拗ナル攻撃ヲ反復シ主トシテ敵輸送船團ヲ撃滅ス

六、捷三號ノ甲作戦ニ於テハ航空部隊ノ主力ヲ本州北部地區及北海道ニ集中シ敵船團ヲ挟撃シ得ル如ク之ヲ實施ス

七、捷三號ノ乙作戦ニ於テハ航空部隊ノ主力ヲ關東地區（信越地方ヲ含ム）以下同シ〜及本州北部地區ニ集中シ主トシテ敵船團ヲ挟撃シ得ル如ク之ヲ實施ス

八、捷三號ノ丙作戦ニ於テハ航空部隊ノ主力ヲ關東地區ニ、各一部ヲ本州北部及中部地區ニ集中シ主トシテ敵船團ヲ各方面ヨリ挟撃シ得ル如ク之ヲ實施ス

九、捷三號ノ丁作戦ニ於テハ航空部隊ノ主力ヲ本州中部地區ニ各一部ヲ關東地區及近畿地區ニ集中シ主トシテ敵輸送船團ヲ各方面ヨリ挟撃シ得ル如ク之ヲ實施ス

七、捷三號ノ戊作戦ニ於テハ航空部隊ノ主力ヲ九州地區ニ、各一部ヲ中國、四國、朝鮮ニ集中シ主トシテ敵輸送船團ヲ各方面ヨリ挟撃シ得ル如ク之ヲ實施ス

本本作戦ニ使用スル航空部隊左ノ如シ

A、内地部隊

- 10FD {
  - 1FR
  - 18FR
  - 53FR
  - 47FR
  - 70FR
  - 244FR
  - 17FG
- 11FD {
  - 246FR
  - 53FR
  - 56FR
  - 55FR
- 12FD {
  - 4FR
  - 59FR
  - 19FG
- 16FB {
  - 51FR
  - 52FR
- 60FR
- 10FR
- 12FB {
  - 1FR
  - 2FR
  - 2FR
  - 1FR
  - 1FR
  - 1FR
  - 2FR
  - 2FR

航空部隊  
教導部

校校校校校校  
明常兵濱下字

B、外地ヨリ轉用スル部隊  
臺灣ヨリ轉用スル部隊  
司偵一戦隊

比島ヨリ轉用スル部隊  
 戰闘二戰隊  
 裝擊二戰隊  
 重爆一戰隊  
 戰闘二戰隊  
 艦爆二戰隊  
 支那ヨリ轉用スル部隊

去機種ニ應スル使用區分概ネ左ノ如シ

- A 偵察 一〇〇式司偵
- B 空母及輸送船ニ對シ
  - 對空砲火筒座 一式戰、重爆
  - 爆撃掩護 二式戰、四式戰
- Q 空母攻撃 キ六七
- D 輸送船攻撃 九九襲、九九双輕、一式戰、二式複戰、三式戰、重爆

去敵ノ本土要域ニ對スル機動空襲ニ方リテハ防空態勢ヲ強化スルト  
 共ニ第五項要領ニ拘ラス機先ヲ制シテ敵ヲ攻撃ス

第四 地上作戦

去東部軍ハ捷三號ノ甲、乙、丙作戦ヲ準備ス丙作戦ニ重點ヲ置ク第  
 三十六軍ハ主トシテ丙作戦ニ使用シ狀況ニ依リ乙又ハ丁作戦ニ使  
 用シ得ル如ク準備ス

去中部軍ハ捷三號ノ丁作戦ヲ準備ス一師團ヲ丙又ハ戊作戦ニ轉用シ  
 得ル如ク準備ス

去西部軍ハ戊作戦ヲ準備ス  
 捷二號作戦ニ方リテハ一師團（馬匹ヲ除ク）ヲ第三十二軍方面ニ  
 轉用シ得ル如ク準備ス

去各軍ノ作戦準備ハ昭和二十年三月末ヲ目途シ概成スルモノトス  
 大築城ノ實施其ノ他ニ關シテハ別ニ示ス

昭和十九年七月第三十二軍ハ西部軍司令官ノ隷下ヲ離レ第十方面軍

司令官ノ職下ニ入ラシメラル

五 昭和十九年十月比島「レイテ」ニ戦闘開始セララルヤ大本營ノ捷號作戰計畫ニ基キ航空兵力ノ主力ヲ同方面ニ轉用セシメラル然レドモ内地防空ニ使用シ得ヘキ航空兵力ハ概ネ當時ノ戦力ヲ保持スルコトヲ得タリ

六 昭和十九年十二月教導航空軍ヲ第六航空軍ニ改編シ防衛總司令官ノ職下ニ入ラシメラル防衛總司令官ヘ之ニ防空ヲ除キタル進攻及對上陸作戰準備ヲ爲スベク命シタリ

當初第六航空軍ノ新設ト共ニ全防空飛行隊ヲ指揮シテ防空ニ任セシメントスル案研究セラレタルモ情報竝ニ指揮通信網ハ凡テ地上軍ノ專管セント高射砲及照空燈ハ地上軍ニ屬シ完全ニ之等ヲ一体的ニ運用センガ爲ニハ數ヶ月ノ準備ヲ要ストノ見地ニ基キ漸進的ニ之ヲ準備ヲ進ムルコトトセラレタリ

七 昭和二十年二月中旬<sup>左ノ如キ</sup>内地防衛軍ノ戦闘序列ヲ令セラル

内地防衛軍  
(防衛總司令官)

- 第十一方面軍
- 第十二方面軍
- 第十三方面軍
- 第十五方面軍
- 第十六方面軍
- 第六航空軍

- 第十飛行師團
- 第十一飛行師團
- 第十二飛行師團

右ニ於テ第十一、(第十三)方面軍ハ東北(東海)地方ニ新設セラレタルモノニシテ第十二(第十五、第十六)方面軍ハ東部(中部、西部)軍ヲ改變セルモノナリ  
第十一乃至第十六(第十四欠)方面軍司令官ハ各々東北、東部、東海、中部、西部、各軍管區司令官ヲ兼任シ方面軍司令官タル性格ニ於テハ純作戰部隊トシテ防衛總司令官ニ職シ軍管區司令官タル性格ニ於テハ軍政部面ヲ擔當シ陸軍大臣ノ區處下ニ在リ

防衛總司令官ハ軍管區司令官ヲ防衛ニ關シ指揮シ得ルコトトセラレタルヲ以テ防衛總司令官ハ事實上内地所産ノ全方面軍及軍管區部隊ヲ指揮シ又航空作戰海上交通保護ニ關シ第十七方面軍司令官（在朝鮮）ヲ從來ニ比シ指揮系統ハ一校ノ明確化ヲ加ヘタリ

八内地防衛軍ノ新設ニ方リ大本營ヨリ受ケタル命令ノ要旨左ノ如シ  
防衛總司令官ハ侵寇スル敵ヲ撃滅シテ其ノ企圖ヲ破潰シ以テ皇土ノ確保ニ任スヘシ

任務達成ノ爲準備スヘキ要綱左ノ如シ  
（イ）本土ニ於ケル作戰準備ノ策點ハ關東地方、九州地方及東海地方トス

又右地域及阪神地方ニ於ケル各要域ノ防空ヲ重視ス  
（ロ）敵空襲ニ際シテハ進時之ヲ延擧スルノ外海軍ト協同シ本土側邊ニ來攻スル敵機動部隊ノ擊滅ニ努ム  
（ハ）敵ノ侵寇ニ方リテハ極力之ヲ洋上ニ擊滅スルコトニ努ム

（ニ）陸上交通及港灣ノ防衛ヲ重視シ又特ニ本土、朝鮮間ノ海上交通要衝ノ防衛ニ遺憾ナカラシム

九防衛總司令官ハ戰術序列ノ發令ニ伴ヒ大本營ヨリ受ケタル任務ニ基キ各方面軍司令官ニ對シ夫々左ノ如キ作戰地域ヲ與ヘ作戰準備ヲ實施セシム

- 第十一方面軍……東北六縣
- 第十二方面軍……關東七縣及長野、新潟兩縣及靜岡縣ノ一部
- 第十三方面軍……富山、石川、富山、愛知、三重、各縣
- 第十五方面軍……中國及四國
- 第十六方面軍……九州

各方面軍ハ一面防空作戰ヲ實施シツツ他面敵ノ上陸ニ備ヘ既定ノ計畫ニ從ヒ銳意沿岸築城其ノ他陸上陸作戰準備ヲ實施セリ  
七第一、第二總軍ノ新設並ニ指揮轉移ノ準備、昭和二十年初頭頃敵ノ本土上陸愈々必至ナルヘキヲ豫察セラル、ニ及ヒ本土全城ノ防衛ヲ

一指揮官（防衛總司令官）ノ任務トスルハ負擔過重ナルヲ以テ東半部、西半部ニ二分シ夫々第一、第二總軍司令部ヲ新設セララルコトトナリ四月上旬之ガ發令ヲ見タリ

右ニ關聯シ三月下旬本土決戰ニ臨スル作戰準備要綱ノ内示ヲ受ケ防衛總司令部亦之ニ基キ研究ス

四月十五日防衛總司令部ヲ復讐シ第一、第二總軍司令部新設セラレ業務ヲ之ニ移管セリ

其昭和二十年春季頃ノ各方面軍ノ作戰準備

(一) 第十一方面軍

管内ノ廣大、交通網ノ貧弱、兵力量ノ僅少等ノ爲作戰準備ノ進歩ハ遅々タリシモ四月頃ニ至リ仙臺平地及下北半島頭部附近要域ノ戰備漸ク其ノ緒ニ就ケリ

(二) 第十二方面軍

本土決戰ニ於ケル重要部面タル關東平地ヲ擔當シ兵力資材亦他方

面ニ比シ豐富ナリシモ作戰準備ヲ制扼スル政治的因子モ亦多ク困難ヲ極メシガ二月方面軍司令部ノ新設後漸ク進歩スルニ至レリ

當時敵ノ上陸正面ヲ九十九里濱正面、相模灣正面、鹿島灘正面ノ

三正面ト判斷シ準備セルモ四月頃ニ於テハ單ニ九十九里濱正面ノ戰備稍々進歩セル程度ニシテ他正面ハ其ノ緒ニ就ケルノミナリ

(三) 第十三方面軍

本作戰地域ハ從來中部軍ノ擔當セル所ニシテ他方面ニ比シ準備最モ遅レアリシモ二月第十三方面軍ノ新設後漸ク其ノ緒ニ就ケリ

本地域ニ於ケル戰備ニ於テハ從來濱松以西伊勢灣口兩側地域ヲ最モ重視セルモ御前崎附近亦重視ヲ許サルヲ以テ速急ニ御前崎附近ニモ戰備ヲ進ムルコトトナレリ

(四) 第十五方面軍

本作戰地域ハ紀伊半島、四國、中國等ニシテ各地域ハ各々隔絶シ且敵ノ朝鮮海峽突破後ニ於ケル日本海正面ヨリノ上陸ヲモ顧慮セ

二〇  
サルヘカヲサルヲ以テ作戦準備ハ困難ヲ極メタリ  
而シテ四月頃ニ於テハ四國、高知附近ニ若干ノ戦備ヲ實施シ得タ  
ルニ過キズシテ其ノ他ハ計畫ノ實現ハ未ダ着手セラレザリキ  
同第十六方面軍

敵ノ上陸九州方ニタルヘシトノ判断激化スルニ從ヒ本作戰地域ノ  
作戰準備ハ最モ重視セラレ且緒大ノ努力ニ依リ其ノ作戰準備ハ各  
方面軍中長モ進捗セリ即チ四月頃ニ於テ大隅、薩摩半島、宮崎平  
地、南西諸島ノ戦備陣地ノ強度ニ於テ概ネ計畫ノ五〇%ニ達シ兵  
站の準備ニ於テモ相當ノ進捗ヲ見タリ

内第六航空軍

第六航空軍ハ本土決戦ニ於テ最モ重要ナル航空作戰ヲ主宰スル爲  
訓練、飛行場設定、整備、補給等各部面ニ亘リ複雜ナル準備ヲ進メ  
タリ即チ敵上陸軍ヲ上陸前ニ洋上ニ於テ撃滅スル爲全機特攻ノ主  
旨ニ則リ秘匿飛行場ノ設定、燃料彈薬ノ分散秘匿通信網ノ對燃整  
備等ニ全力ヲ傾倒セルモ四月頃ニ於テハ漸ク其ノ緒ニ就ケリ  
第六航空軍ハ昭和十九年末以來要時「サイパン」攻撃ヲ實施シ司  
令部ハ昭和二十年春九州、福岡ニ移轉ス

第二章 防空作戰

一、開戦前後ノ準備

防衛總司令部編成後ニ立案セル国土防衛計畫ハ參謀總長ヨリ示達  
セラレタル国土防衛計畫訓令ニ準據シテ計畫シ京濱、阪神、北九州  
名古屋ノ四要地ヲ基幹トシ之ガ直接防空ヲ骨幹トアセリ、防空ハ防  
空兵力ノ確保上高射砲部隊ト飛行部隊トノ兩者併用主義ヲ採レリ  
十二月八日開戦ト共ニ東部、中部、西部、臺灣各地域ノ防空實施ヲ  
命ゼラレ以上ノ各軍及其ノ地域ノ防空部隊ハ所要ノ配備ニ就ケリ  
防空實施ニ當リ北部、朝鮮ノ兩地域ヲ除キタルハ當時ニ於ケル日米  
兩軍ノ勢力ヲ顧慮シ防空上主トシテ考慮ヲ要スルハ太平洋正面ナルコト、露  
聯邦ニ對スル刺戟ヲ避ケントセルトニ依ルモノニシテ防空ノ配備ニ  
於テモ計畫ノ一部ヲ變更シテ太平洋岸ヲ重視セリ  
此ノ時期ニ於ケル防空兵力ハ高射砲約三百門、飛行機約八十機ナリ

キ



内地ハ前戦後早晚空襲ヲ受クルコト必至アリトノ判断ノ下ニ防空作  
戦準備ヲ整ヘアリシガ當初外地作戦ノ成功ニヨリ本土ニ對スル敵機  
ノ來襲アカリシヲ以テ爾後ハ防空部隊ヲシテ概ネ其ノ配置ニ就キタ  
ルマ、情勢ニ應スル如ク戦備ノ度ヲ律シツ、教育訓練ヲ行ハシメ戦  
力ノ向上ニ努メタリ

二昭和十九年初頭ニ於ケル空襲判断ト作戰準備

一開戦當初ニ於ケル日本本土ニ對スル空襲判断左ノ如シ

米軍ハ日本本土ニ對シ空襲スルノ能力少カルヘキモ戰略的效果ヲ  
收メ且攻略作戦ニ任スル我ガ航空兵力ヲ牽制スル目的ヲ以テ「ア  
リュウシヤン」又ハ「ミッドウエー」方面ヨリ長距離水上機ヲ以  
テ本土東北部方面ニ空母搭載機等ヲ以テ本土中樞部ニ支那浙江省  
方面ヨリ大型陸上機ヲ以テ本土西部方面ニ一部ノ奇襲ヲ實施スル  
コトアルヘク此ノ場合ニ於テモ實質的效果ハ大テラザルベシ

2 防衛總司令官ハ以上ノ判断竝ニ防空部隊ノ兵力、素質等ニ基キ概

ネ左ノ如ク防空部隊ヲ部署ス

東部軍司令官ヲシテ<sup>244PR</sup>（防空專任）<sup>5PR</sup>（主トシテ教育ヲ擔任シ臨

機防空ヲ行フ）及畿下高射部隊（防空旅團）ヲ併セ指揮シ主トシ

テ京濱地區ニ於ケル戰政略及生産中樞ヲ掩護セシム

中部軍司令官ヲシテ<sup>13PR</sup>（主トシテ教育ヲ擔任シ臨機防空ヲ實施

ス）及畿下高射部隊（防空旅團）ヲ併セ指揮シ主トシテ名古屋

阪神地區ニ於ケル生産中樞ヲ掩護セシム

西部軍司令官ヲシテ<sup>4PR</sup>（主トシテ教育ヲ擔任シ臨機防空ヲ實施ス

及畿下高射部隊（防空旅團）ヲ併セ指揮シ主トシテ倉崎（關門

含ム以下同シ）地區ニ於ケル生産中樞ヲ掩護セシム

北部軍司令官、朝鮮軍司令官及臺灣軍司令官ヲシテ其ノ畿下高射

部隊ヲ以テ夫々主トシテ室蘭、札幌、釜山、京城、水豊、高雄、

臺北、日月潭等ヲ掩護セシム

3 當時ニ於ケル防空能力左ノ如シ

A 主要ナル要地ニ於ケル防空兵力

京濱地區	飛行機約五〇機	高射砲約一五〇門
名古屋地區	飛行機約一〇機	高射砲約二〇門
阪神地區	飛行機約二〇機	高射砲約七〇門
倉庫地區	飛行機約二〇機	高射砲約七〇門

右ノ部隊ハ外征部隊ニ比シ素質低ク飛行機ハ九七式戦闘機ヲ主トシ高射砲ハ七、五種砲ヲ充當セリ

B 情報機關

電波情報機關ハ電波警戒機甲(二局ヲ結フ線ヲ横斷スル場合其ノ線ノ通過ヲ知ル)ヲ配置シ未タ電波警戒機乙(位置ヲ偵知ス)ヲ配置シアラズシテ軍民ノ肉眼監視哨ヲ以テ監視ノ主体トナシ又海上本土ヲ距ル約六〇〇哩ニ海軍ニ於テ小艦 視船ヲ配置セリ

三 米軍第一回機動空襲ト之ニ伴フ作戰準備

1 空襲狀況ノ大要

昭和十七年四月十七日海軍情報ニ依リ米航空母艦ノ一部日本本土ニ近接シツアルヲ知り防衛總司令官ハ四月十八日八時頃東部軍ニ警戒警報發令ヲ命ジ各部隊ハ直ニ警戒姿勢ニ移レリ正午頃水戸附近ノ監視哨ヨリ米機空襲ノ報告アリタルモ當時中型機ヲ空母ニ搭載シ離艦セシムルガ如キコトハ豫期シアラザリシヲ以テ小型機ノ行動半盛ヨリ判斷シテ空襲ノ公算最も多キハ四月十九日早朝頃ト豫想シアリタリ隨ツテ東部軍ハ直ニ空襲警報ヲ發令スルコトナク其ノ眞否ヲ調査中先頭機ノ空襲ヲ受クルニ至レリ此處ニ於テ東部軍ハ直ニ空襲警報ヲ發令シ戰鬥ヲ開始セルモ防空戰鬥機及搭載機關銃ノ性能上敵機ヲ捕捉スルニ至ラス高射砲亦低空ニ行動スル敵機ニ對シ其ノ威力ヲ發揮スルニ由ラクシテ防空ノ缺陷ヲ露呈セリ

2 右ニ伴フ作戰準備

A 第一航空軍司令部及防空專任飛行團司令部ヲ新設シ第一航空軍司令部官ハ防衛ニ關シ防衛總司令官ノ指揮ヲ受ケシメラレタルヲ以

防衛總司令官ハ各飛行區ヲ夫々左ノ如ク各軍ニ配屬シ所要ニ  
 應シ一部兵力ヲ他ニ轉用スル如ク部署ス

東部軍配屬  
 17FB (中)  
 司偵一中、5FR、244FR、47FC

中部軍配屬  
 18FB (中)  
 司偵一中、13FR、246FR

西部軍配屬  
 19FB (中)  
 司偵一中、4FR、248FR

又空襲警報發令間明野陸軍飛行學校、陸軍航空技術研究所等ノ  
 出動可能ノ戦闘機ヲ防衛總司令官ノ指揮下ニ入ルル如ク陸軍航  
 空總監(陸軍航空本部長)ト協定セシヲ以テ空襲警報發令ト共

ニ前者ヲ中部軍司令官ノ後者ヲ東部軍司令官ノ指揮下ニ入ラシ  
 メ空襲警報解除ト共ニ配屬ヲ解ク如ク處置ス

B. 防空旅團ヲ防空集團ニ改編増強セシムルト共ニ兵力ノ増加ニ勉  
 メ且低空火器及防空氣球ヲ増加ス

尙就重要地防空ノ研究ヲ進メ八種、十二種高射砲ノ製作、電波  
 標定表研究、通信施設其ノ他裝備ノ改善ニ勉メタリ

C. 電波警戒機(乙)ノ配屬ヲ促進ス  
 D. 機群各軍相互間竝ニ支那派遣軍、蒙東軍等トノ連絡ヲ緊密アラシ

E. 低高度高速目標ニ對スル訓練ヲ實施スルト共ニ次期空襲ハ大高  
 度又ハ夜間アルヲ懸念シ大高度又ハ夜間訓練ヲ重視シ其ノ戰鬥  
 能力ノ向上ヲ期ス

F. 九七式戦闘機ノ如キ速度遲キ飛行機ニ被動的戰鬥行動ヲ要求ス  
 ルモ單ニ敵機ヲ捕捉シ得サルノミナラス其ノ虛ヲ衝カルル公

算極メテ大ナルヲ以テ巷犬的ニ要地直上ニ占據シ敵機要地ニ近  
接セバ之ヲ攻撃シ速度早キ新鋭機ハ巷犬的ニ成ルベク遠ク敵機  
ヲ捕捉スル如ク機種ニ感シ其ノ用法ヲ適切ナラシム

日本土ニ對スル本格的空襲ニ關スル判斷ト之ニ對スル作戰準備

昭和十八年四月頃米國(對日空襲兵器)トシテ<sup>B29</sup>ノ製作ヲ開始セリ

トノ情報ヲ得之カ使用開始ハ早クモ昭和十八年秋以降ナルベシト

判斷セリ然ルニ昭和十八年中ハ之カ出現ヲ見ルコトナク翌昭和十

九年一月頃ニ於ケル判斷ニ於テハ四、五月頃ニ至ラバ支那基地方面

<sup>B29</sup>ニ<sup>B</sup>五〇機内外進出ヲ見ルヘシト考ヘラレタリ

2 作戰準備

▲兵器の準備

中央部ニ於テハ威力大ナル火器ヲ裝備セル高々度戦闘機ノ現出ニ  
有ユル努力ヲ傾注セラレタルモ高々度戦闘機ハ遂ニ部隊ニ迄普及  
裝備スルニ至ラス

十二種高射砲ハ昭和十九年初頭ヨリ遂次一部ヲ重要ナル要地ニ  
配置スルニ至レリ

B 訓練

訓練ノ重點ハ高々度戦闘機、夜間戦闘機、對爆撃機ニ置ク方針ニ基  
キ防衛總司令官ハ幾、指揮下部隊ニ對シ訓練ニ關スル指示ヲ示  
意シ訓練ノ精到ヲ期セリ其ノ狀況竝ニ成果次ノ如シ

(I) 高々度戦闘機

現裝備機ヲ以テ如何ニシテ高々度上昇ノ時間ヲ短縮セシムヘ  
キヤ如何ニシテ高々度在空中時間ヲ増加スヘキヤ等ハ訓練ノ重  
點アリ  
高々度上昇時間ヲ短縮センガ爲最大「ブーラスト」ヲ以テ上昇  
センカ機體ノ故障續出スルノミアラズ「オーバーホール」時  
間ヲ短縮セザルベカラズ又大編隊爆撃群ニ對シテハ戦闘隊亦  
編隊攻撃ヲアササルヘカラサルヲ以テ編隊上昇ヲ企圖セハ所

要時間ハ減少セシメ待サル實情ニ在リ又機種（四式戰）ニ依リテハ高々度ニ於テ點火狀況變化シ不具合等少カラス訓練用燃料亦少ク之等各種ノ障礙アリシモ部隊ノ訓練ハ猛烈ニ極メ昭和十九年夏頃ニ至リ九千米以下ニ於ケル部隊訓練ハ辛シク實施シ待ル程度トアレリ

(2) 夜間戦闘（悪天候突破攻撃）

各兵團ハ夜間航法施設及夜間飛行計器ノ裝備充分アラサリシヲ以テ自ら對空無線施設ヲ航法的ニ改造訓練スルト共ニ飛行機ニ水葦器ヲ裝備スル等有ユル創意工夫ヲ行ヒタリ然レドモ本來之ニ適應セル部隊ニアラザリシヲ以テ成果必スシモ擧ラス又連日ノ猛訓練ハ操縦者ノ疲勞ヲ來シ且飛行機ノ不適ハ夜間ニ於テ決定的ノ事故ヲ招來スル等極メテ困難ナル狀況ニ立至リシガ各飛行兵團長ハ依然夜間訓練ヲ續行セリ

又夜間戦闘ニ必要ナル電波兵器ハ遂ニ研究完成スルコトナク主トシテ照空燈トノ連繫範圍ニ於テ實施セザルベカラザル狀況ナリキ

(3) 對爆撃團訓練

各兵團ハ對爆撃團ヲ主眼トシテ訓練シアリシモ從來突然部隊ヲ外地ニ轉用セラレ對戰團機關ヲ選カニ實施セザルベカラザル實情アリタルヲ以テ之ガ徹底ヲ期スルコト能ハザリキ而シテ對爆撃團ニ徹スベキ指示ニ基キ各部隊ノ訓練ハ戰團可能高度ノ範圍内ニ於テ概ネ所期ノ目的ヲ達シ待ルガ如キ程度トアレリ

(4) 高射部隊ニ示範不右ニ準ジテ戰力ノ向上ヲ期シ屢々巡回教育及集合教育ノ勵行ニ勉メ特ニ高々度戰團ノ爲測高精度ノ向上及有效威力區ノ活用ニ關シ訓練ノ精到ヲ圖レリ

昭和十九年四月陸東部、中部、西部、各高射集團ニ夫々教育

一大隊ヲ新設セラレ作戰任務ニ服スルト共ニ下級幹部ノ養成

ニ任ジ集團内集合教育ヲモ擔任シ教育ノ一骨幹ヲナセリ

U 部隊ノ新設組織ノ強化

昭和十九年四月頃ヨリ夜間專任部隊トシテ先ヅ<sup>53FR</sup>ヲ新設シ次テ

ヲ改編シ高々波戰團部隊トシテ各飛行團司令部偵察隊ニ人員

器材ヲ増加配屬シ軍隊區分ニ依リ司偵隊、戰團隊ニ分離シテ運

用ス又滿洲ヨリ<sup>83FR</sup>（司偵）ヲ内地ニ轉用シ戰團隊ニ改編セラレ

タルヲ以テ之ヲ東部軍ノ指揮下ニ入ラシム

D 組織ノ強化

防空飛行隊ノ隷屬系統ハ教育部隊ニシテ作戰任務ヲ有セザル第一

航空軍アリシヲ以テ之ヲ是正シ且防空戰團隊ノ指揮能力及兵站能

力ヲ増加スルノ必要上各飛行團（<sup>17FB</sup> <sup>18FB</sup> <sup>19FB</sup>）ヲ夫々編團（<sup>10FD</sup> <sup>11FD</sup> <sup>12FD</sup>）

ニ改編シテ之ヲ防衛總司令部ノ部下部隊タラシメラレタリ此處ニ

於テ防衛總司令部ハ<sup>10FD</sup> <sup>11FD</sup> <sup>12FD</sup>ヲ夫々東部、中部、西部各軍司令部ノ

指揮下ニ入ラシメ各軍ヲシテ防空ノ完璧ヲ期セシメタリ

B 防空關係兵力ノ一元的運用

國內ノ防空專任兵力ハ極メテ劣勢ナリシガ陸軍航空總監、陸軍

航空本部長總下部隊等ニハ戰團隊力ヲ保有スルアリ此等ヲ一

元的ニ防空作戰ニ使用スルヲ待策アリトシテ陸軍大臣ノ權限ニ

依リ情勢ニ應シ此等部隊ヲ隨時戰團隊勢ニ移行セシメ之ヲ防衛

總司令部ノ指揮下ニ入ラシムルコトトシ本態勢移行ノ爲ノ作戰

名稱ヲ「東二號」ト稱ス防衛總司令部ハ此等ノ部隊ヲ其ノ素質

位置等ニ應シ東部、中部、西部各軍司令部ノ指揮下ニ入ラシム

又海軍飛行隊<sup>302FR</sup>（横須賀）<sup>303FR</sup>（吳及佐世保）ヲ作戰ニ關シ防衛

總司令部ノ指揮下ニ入ラシメラレタルヲ以テ前者ヲ東部軍司令部

官、後者ヲ西部軍司令部ノ指揮下ニ入ラシメタリ

F 戰法ノ更新

防空飛行隊ハ當初兵力僅少且飛行機ノ性能充分ナラザリシニ鑑

ミ會戰率ヲ大アツシムル爲要地上空ニ於テ戰闘スルノ止ムヲ得  
 ザル狀態アリシモ兵力漸増シ新式機體備セラルルニ及ビ先ツ要  
 地附近上空ニ陣營陣的配備ヲ取り次テ敵主力ノ來攻方向ヲ偵知  
 セバ其ノ方面ニ推進スル如ク戰闘ヲ指導セリ又電波兵器ノ整備  
 ニ伴ヒ更ニ遠ク推進シ遠擊スル如ク研究訓練ニ努メタルモ陸地  
 ニ於ケル航跡極メテ不確實ナルト電波兵器技術未タ幼稚ニシテ  
 大ナル成果ヲ收ムルニ至ラザリキ  
 G 昭和十九年六月頃ニ於ケル防空部隊ノ兵力（臨機防空ニ任ズル  
 モノヲ含ム）概ネ左ノ如シ

東 部	飛行機約四〇〇機	高射砲約三〇〇門
中 部	飛行機約二〇〇機	高射砲約一五〇門
西 部	飛行機約一五〇機	高射砲約一五〇門
朝 鮮	飛行機約二〇機	高射砲約五〇門

五成都基地ヨリ B29ノ來襲

成都方面ノ基地ハ遂次増強セラレ六月十五日夜遂ニ倉庫地區ニ B29 約  
 一〇〇機來襲ス濟州島ノ電波發射機ハ克ク敵情ヲ探知シ防空飛行隊  
 及高射部隊ノ奮戦ト相俟テ其ノ七機ヲ墜墜ス而シテ當時戰闘ニ從事  
 セシ部隊ハ B17 又ハ B24 ナルベシト判斷シアリシモ墜機機體殘骸ニ依リ  
 アルコト判明スルト共ニ攻撃ノ方法ニ依リテハ墜墜必ズシモ困難ナ  
 ラス而シテ該方面ヨリノ來襲頻度増加スベシト判斷シ準備スル所ア  
 リ爾後屢々來襲セシモ第一等ニ於テ相當ノ打擊ヲ與フヘク一部ヲ濟州  
 島ニ派遣シ或ハ一部兵力ヲ中部方面ヨリ西部ニ轉用スル等ニ依リ敵  
 ハ倉庫地區ニ進入スルコト少ク或ハ九州海岸ニ到達スルノミニテ歸  
 還シ或ハ重要アラザル方面ニ一機乃至ハ二機宛潛入シ或ハ急遽南鮮  
 ニ向フ等戦法ヲ變更シ或ハ滿洲鞍山ニ攻撃目標ヲ變換セリ  
 ハ「サイパン」「フィアン」ノ失陥ト航空基地ノ變化  
 「サイパン」「フィアン」ノ失陥ニ伴ヒ同諸島ノ地形及米軍ノ基地  
 設定能力ニ鑑ミ約八處隊ノ B29 基地ノ設定可能アルモノト判斷セリ

即チ十九年秋季（十月頃）ニハ少クモ大型機約五十機ヲ以テ内地  
ヲ空襲シ得ルニ至ルベク爾後毎月約五十乃至百機ヲ増加シ得ヘント  
判断セラレタリ

七「マリヤナ」基地ヨリB29ノ來襲

「マリヤナ」方面ヨリ内地ニ對スル空襲ハ十二月上旬單發關東地方  
ニ來襲セシヲ最初トシ偵察行動ト目セララルル少數機ノ來襲約一箇月  
間繼續シ二十年一月ニ入り部隊ヲ以テスル爆撃行動開始セラレタリ  
而シテ來襲機數モ一月ニハ約五十機程度ヲ出テザリシガ二月以降  
急速ニ増加シ四月ニハ延約千機ヲ數フルニ至レリ爆撃目標モ當初ハ重  
要航空機工場アリシガ三月十日東京ニ對スル稍々大規模爆撃攻勢以來  
主要都市ノ焼夷、交通線遮断、航空工場以外ノ主要工場ノ破壊、地方  
中小都市ノ破壊等ト進展スルニ至レリ  
ハ防空部隊ノ補充配置ノ概要

昭和十九年八月第二十三飛行團ヲ編成セラレ防衛總司令官ハ之ヲ中部

軍ニ配屬セリ

其ノ後防空飛行隊ノ指揮隸屬系統ハ昭和二十年四月ニ至ル迄大ナ  
ル變化無シ

コノ間航空部隊ハ敵機來襲ニ對シ兵力ノ集結運用ヲ圖ランガ爲「航  
空戰策」ニ基キ一乃至二箇戰隊ヲ臨機各方面單相互間ニ轉用セリ  
高射部隊ノ配置ニ關シテハ當初ハ諸般ノ關係上大都市掩護ハ主トシ  
テ其ノ周縁ニ配置セラレシガ逐次掩護スベキ緊要ナル地點（施設）  
ヲ検討シ之ニ對シ兵力ノ徹底的集中ヲ圖リ最重要施設ノ掩護ノ完璧ヲ期セ  
ントセシモ施設ノ不充分、機動力ノ皆無等ノ爲遂ニ充分ノ處置ヲ見  
ルニ至ラス

別ニ昭和二十年初頭頃ヨリ交通要點及生産施設疎朗中、小要地ノ防  
空強化ノ必要ヲ痛感スルニ至レルモ前記理由及特ニ兵力不足ノ爲配  
備ノ轉換進捗ヲ見ズ

昭和二十年三月頃ニ於ケル防空飛行隊ノ編成配置別表第一ノ如ク高



射部隊ノ兵力別表第二ノ如シ

空襲敵化ニ伴フ設備編制訓練等ノ變遷

(1) 高々度戦闘對策

成都方面ヨリ九州ニ來襲セルB29ハ高々度機シテ八〇〇〇米以下ナリシヲ以テ在來ノ飛行機及戰法ヲ以テ對抗シ得シモ「マリアナ」方面ヨリ來襲セルモノハ高々度一萬米ニ達シ在來ノ飛行機及戰法ヲ以テシテハ擊墜不可能アルヲ以テ各當番者ハ之ガ對策ニ腐心シ「ロケット」推進式「秋水」ノ試作實用化ヲ急ギシモ遂ニ終戰迄之ガ實用ニ至ラズ實施部隊ハ已ムヲ待ス武装ヲ極度ニ減少シテ上昇性能ヲ向上シ且猛訓練ニ依リ二十年二月、三月頃ニ至リ概ネ九〇〇〇米附近ノ戰鬥ヲ實施シ得ルニ至レリ

(2) 武装強化及特殊戰法ノ採用  
 大型機ニ對シテハ從來ノ機關銃機銃砲ヲ以テシテハ威力不十分アリシヲ以テ双發機(キ六七)ノ胴體頭部ニ高射砲ヲ附シ效果ヲ

確實アラシメントシ部隊ノ編成ヲ完了セシモ飛行機ノ性能ハ所望ノ域ニ達セス遂ニ實用ニ至ラス  
 B-29ノ遊撃ノ爲口徑大ナル砲ヲ裝備セル機種次ノ如シ

二式單戰乙

40 X 2  
 13 X 2

四式戰丙

30 X 2  
 20 X 2  
 37 X 1  
 20 X 2  
 102

二式複戦乙

75 X 1  
109  
37 X 1  
13 X 2

茲ニ於テ全戰團機ハ爆彈ヲ搭載シ待テ如ク改造セシモ之ニ依ル攻  
撃ハ空中彈道ノ不齊ト投下行動ノ困難ナルトニ依リ實際之ヲ適用  
セル事例アリ  
兵器ノ改善ニ依ル高々度戰團法確立セザラテ以テ實施部隊ハ遂ニ  
最後ノ手段トシテ体當リニ依ル必墜ヲ期セントシ空ノ特攻隊ノ誕  
生ヲ見タリ防衛總司令官ハ10FD特攻隊ニ對シ「震天隊」12FD特攻隊ニ

對シ「回天隊」ノ名稱ヲ與ヘタリ

(3) 夜間戰團對策

敵機ノ夜間來襲増加スルニ伴ヒ之ガ對策亦苦心セシ所ニシテ防衛  
總司令官ハ夜間戰團專任部隊トシテ更ニ中部軍ニ5FRヲ指定セリ  
而シテ右戰團ノ各種ハ双發夜重機ニシテ三十七耗一門十三耗二  
門ヲ裝備シ夜間戰團ニハ相當活躍セリ  
然レドモ夜間出撃ニ於テハ地上ニ於ケル諸設備ノ不十分ニ基因シ  
消耗スルモノ相當多數ニ上レリ  
夜間戰團ハ「レーダー」ト適合セル無照明邀撃ニ進化スベク技  
術的研究ヲ進メタルモ遂ニ完成ニ至ラス常ニ照空燈ト適合シ邀撃  
ヲ實施セリ  
(4) 高射部隊ハ八糎及十二糎高射砲ノ増加、電波標定機ノ改善實用等  
戦力遂次見ルベキモノアリテ昭和二十年春期頃ニハ實質的戦力概  
ネ最高度ニ達セリ

十 防空作戰實施ノ推移

(1) 十九年後半ノ邀撃作戰

當初ハ主トシテ成都方面ヨリ來襲セシモノニ對スルモノニシテ用兵的ニハ備軍師ヲ要地ヲ固守防衛スルノ思想ヲ出デズ  
防空戰隊亦激戰極メテ僅クナリシ爲自然要地上空ニ待機邀撃スルノ狀態アリキ當時既ニ電波警戒機甲(線狀警戒)ハ一造リ設備ヲ完了シ乙(面狀警戒)亦九州方面ニ於テハ漸ク其ノ性能ヲ發揮シ天派派遣軍ノ通報ト相俟テ高シテ來襲敵ハ尋前ニ探知スルヲ待タリ

本州西部方面ニ於テハ支那派遣軍、關東軍ト情報交換、追尾攻撃等協同作戰(隊間)ヲ企圖シ若干ノ成果ヲ擧ゲタリ然レ共年末「マリアナ」方面ヨリ來襲スルヤ常ニ少數機且高々度アリシ爲飛行隊ハ之ヲ捕捉スルニ至ラズ急速ニ戰法及訓練ニ工夫ヲ加フルノ必要ニ迫ラレ敵ノ航跡ヲ速カニ判定シ之ヲ空中部隊ニ迅速ニ傳

へ空中部隊ハ之ニ基キ所命ノ空域ニ速カニ集結シ得ル如キ訓練ヲ實施スルト共ニ用兵的ニハ各方面各高度ノ空域ニ先ヅ分散出動セシメテ之ヲ「ラデオ」ニ依リ地上ヨリ自由ニ操縦スル用法、或ハ敵ノ内陸進入ト共ニ海岸線及伊豆列島線等敵ノ豫想歸還「コース」ニ退路遮斷部隊ヲ配置スル用法小數機ニ對スル多數機ヲ以テスル連鎖攻撃的用法等ニ工夫ヲ加ヘタリ  
然レドモ之等ノ工夫ガ成果ヲ現スニ至レルハ二十年春季以降ナリキ

而シテ右邀撃作戰ヲ活潑且容易ニセシガ爲「航空戰策」ヲ定メ敵機ノ來襲ヲ豫察セラルルヤ他方面ヨリ一乃至二箇隊ヲ該方面ニ赴援セシメ可及的兵力集結ヲ圖リ實施相當ノ亦效果ヲ發揮セリ

(2) 二十年春以降ノ邀撃作戰

敵ノ行跡廣汎且不規トナリ防空飛行隊亦遂次兵力充實スルニ伴ヒ敵ノ航跡ヲ判斷シ要地ヨリ前方ニ推進シテ要地進入以前ニ敵ヲ邀

撃スルノ方式ヲ採用スルニ至リ訓練亦本用法ヲ基準トシテ實施セ  
キ  
日本用法ニ於テ最モ苦心セルハ情報及命令傳達ノ爲ノ通信ナリ


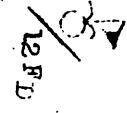
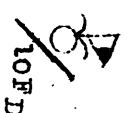
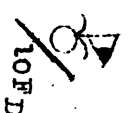
③「マリアナ」進攻

邀撃作戰ニ於テモ敵ノ來襲根源ヲ攻撃スルヲ最モ效果的アリトス  
ル見地ニ基キ「マリアナ」基地ヲ攻撃スルコトトシ第六航空軍  
ヲ之ガ專任ニ充テ訓練及準備ヲ進メ十九年末第一回攻撃ヲ實施  
セリ然レ共其ノ效果ハ必ズシモ大アラザリシカ如シ

1945年3月末現在に於ける

防空飛行隊編成及配置一覽表

別表第一

方面	指揮官	所属	部隊	位階	階級	機	数		
東部及中部方面		臨時機教育部隊ヨリ非常	56 F	大正	△	30	50	120	
			5 F	小牧	△	20	60	130	
			16 FC	大正	△	6			
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			4 F	小月	△	35			
			59 F	藤原		35			
			19 HC	小月	△	6			
			51 F	防府		15			
			52 F			15			
			16FB			15			
中部方面		臨時機教育部隊ヨリ非常	臨時機教育部隊ヨリ非常						
			60			60			
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
關東方面		臨時機教育部隊ヨリ非常	臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
關西方面		臨時機教育部隊ヨリ非常	臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						
			臨時機教育部隊ヨリ非常						

昭和十二年三月頃ニ於ケル高射部隊兵力要

別表第二

朝鮮軍	東北軍	四部軍	中部軍	東海軍	東部軍	區分
		西部高射集團司令部 高射他隊 四 獨立高射他大隊 三 對戰高射他大隊 一 防空大隊 一 機隊他大隊 一	中部高射集團司令部 高射他隊 三 獨立高射他大隊 三 機隊他大隊 一	名古屋高射他隊司令部 高射他隊 二 獨立高射他大隊 一 對戰高射他大隊 一 防空大隊 一 機隊他大隊 二	高射第一師司令部 高射他隊 八 獨立高射他大隊 四 對戰高射他大隊 二 防空隊 一 機隊他大隊 二	部
	高射砲四門	高射砲約三百門	高射砲約二百門	高射砲約五百七十門	高射砲約六百門	摘要
	高射砲約百門					

裏面白紙

第四章 沿岸ノ防禦

一 敵艦判斷ト防禦重點ノ變遷

太平洋戰域ニ於ケル我戰面ノ收縮ト之ニ伴フ北方（「アリエーシヤ」列島）東方（「ミッドウエイ」島、「ウエーキ」島）南方比島方面ヨリスル艦艇空母方ト海上勢力ノ進出ニ對シ益々防禦態勢ヲ強化スルト共ニ激ク沿岸防禦ノ急速ナル實施ヲ必要トスルニ至ル昭和十八年末頃ニ於ケル沿岸防禦ノ重點ハ之ヲ本土ノ太平洋沿岸要域ニ轉キ沿岸要域ノ緊急防禦ヲ計畫準備セリ然レトモ現ニ之ヲ實施セルモノハ從來ノ要域火砲ノ一部及若干ノ野戰用火砲ヲ移動配備セルニ過キズ「サイパン」失陥後眞面目ニ米軍ノ日本本土進取ニ關シ考慮セラルルニ至レリ

コノ要ニ於ケル米軍ノ進取判斷左ノ如シ

イ比島取降後又該沿岸作戦ヲ實施シテ本土進取ヲ準備ス或ハ又該沿岸作戦ヲ省略シテ後進ノ作戦ニ入ル

口津後津渡又ハ沖繩攻略後日本本土西部地方ニ進取ス  
 ハ臺灣・沖繩ニ進取スルコトナク小笠原及硫黄島攻略後直路本土中  
 央部方面ニ進取ス  
 右何レニ依ルヤハ過カニ確シ得サルモ沖繩方面ヨリ本土ニ進取ス  
 ル公算大ナルモノト判断セラレタリ  
 カクテ北方「アリュージヤン」列島方面ヨリスル敵ノ進取ハ其ノ公  
 算減少セルノ情勢ニ鑑ミ昭和十九年六月到上陸軍防禦築城地帯ノ極  
 業ヲ立案ス  
 即チ重要ナル飛行場地帯ヲ確保シ止ムヲ得サルモ敵ノ利用ヲ拘束シ  
 攻勢ノ支障タル如ク骨幹陣地ノ骨幹ヲ構築スル如ク計畫ス  
 昭和十九年末埃沖繩ニ對スル敵ノ上陸企圖益々濃厚トナルヤ上海附  
 近三角地帯ノ防備強化ニ呼應シテ九州南部特ニ西部要域ノ築城ヲ強  
 化擴大スルト共ニ敵ノ航空機及潜水艦ノ妨害ニ對シテ朝鮮海峽ニ紐  
 帶輸送地帯ヲ設定シ大連トノ間ニ輸送ヲ確保セントスル着意ニ基キ

沿岸防備ノ間ノ築城實施ヲシテ之ニ即應セシムル如ク一部ノ計畫ヲ  
 増補ス

三 防禦計畫ノ大綱

本土防衛兵力トシテ陸内常駐部隊及要守備兵力ノ外在滿兵力ノ一  
 部ヲ戰用亦當スベキコトヲ企圖セルモ陸内常駐部隊ハ陸土防衛作戰  
 ノ任務ノ外ニ外征部隊ノ教育、編成、補充ヲ擔任シ陸内防衛ニノミ  
 專念シ得サルノミナラズ右防衛充當兵力量亦自主的ニ之ガ算定ヲ計  
 ササリシ爲陸内作戦指導ノ複雜困難ナルト相俟ツテ計畫ハ一般  
 抽象的ニシテ計畫ノ實施亦遲延スルノ已ムナキ實情ニアリタリ  
 昭和十九年末頃ニ於テ使用ヲ予定セル基幹兵力左ノ如シ

東部軍

- 弘前師團（弘前）
- 仙台師團（仙台）
- 金澤師團（金澤）
- 東京師團（東京）
- 第三十六軍（東部軍指揮下）
- 第四十四師團（宇都宮）
- 第九



十三師團（靜岡）、戦車第一師團（千葉）  
中部軍

名古屋師團（名古屋）、大阪師團（大阪）、第八十四師團（坂路）京都師團（京都）

但シ名古屋師團ノ歩兵約三大隊、砲兵一大隊八中隊七島方面ニ對シ又第八十四師團ハ外征部隊トシテ轉用ヲ準備シタリ

四部軍  
善通寺師團（善通寺）、久留米師團（久留米）、熊本師團（熊本）  
本一廣島師團（廣島）

但シ熊本師團ノ一部ハ北部甲西諸島ノ増援ノ爲轉用ヲ準備ス  
朝鮮軍

樺太師團（樺太）第二十師團（平壤）  
別ニ在滿兵力ヨリ約二ヶ師團、轉用ヲ予定ス

### 三 築城ノ構想

1. 國內ノ治安整備、生産交通機構ノ維持等ノ關係上國內決戦ハ國土ノ一部ト雖モ敵ノ上陸後長ク之ヲ放棄スルコトヲ許ス能ハズ勢ヒ眞面目ナル敵ノ上陸ニ對シテハ沿岸決戦ヲ指導スベク計畫セリ

2. 敵攻勢力ノ主體ハ其ノ航空戦力ト海上機動戦力ニシテ之ニ對シテハ我亦航空戦力ノ攻勢的運用ト敵航空戦力ノ滅殺、制肘ヲ主眼トセリ之ガ爲メ沿岸ニ於ケル我カ進攻機軸基地、防空ノ爲メノ航空基地及敵ノ利用スベキ航空基地ノ確保ニ著意シテ防禦地域ヲ決定スルト共ニ沿岸所要ノ島嶼ニ對シテハ之ガ増強確保ノ爲メ海上機動兵力ヲ以テスル逆上陸ヲ準備セリ

3. 敵ノ航空機、潜水艦等ニ對シテ大連トノ紐帶輸送路（膠水附近）長崎附近、釜山——臨門地區ヲ結ブ海域ノ確保ノ爲メニハ群山附近ノ西甲部朝鮮要城、濟州島及五島ニ飛行場及舟艇基地ヲ含ム築城ヲ天々計畫ス

四 築城實施ノ大綱

ノ提三號作郵準備要請ニ基キ第一次沿岸築城ヲ昭和十九年六月頃ヨ  
リ立案シ同年七月末防衛築城部ヲ新設シテ同年秋ヨリ着手シ昭和  
二十年春季之ヲ完成シ引續キ第二次沿岸築城ニ入レリ

〔要旨〕

昭和二十年三月末頃迄ニ骨幹陣地帯ノ骨幹ヲ概成シ引續キ之ヲ増  
強ス

□各地區ノ築城種築計費量及之ヲ緩急順位左ノ如シ

西部隊		中部隊			東部隊					軍管區別	地名	種別	第一	第二	第三
西四島 (種子島)	外九部	和歌山 附近	豐橋 平地 (伊勢灣口ヲ含む)	相模灣沿岸	鹿島 沿岸	水戸 平地	仲豆島 (八丈島、新島、大島)	仲豆島	八戸 平地	種別	第一	第二	第三		
	下陸、陸奥 半島	高地 附近	伊勢灣口ヲ含む	相模灣沿岸	鹿島 沿岸	水戸 平地	仲豆島 (八丈島、新島、大島)	仲豆島	八戸 平地	種別	第一	第二	第三		
歩兵二大隊	歩兵六大隊	歩兵三大隊	歩兵三大隊	歩兵三大隊	歩兵五大隊	歩兵一大隊	各歩兵三大隊	歩兵二大隊	歩兵三大隊	種別	第一	第二	第三		
○	SA陣地ノミ		SA陣地一部	SA陣地ノミ	SA陣地ノミ	SA陣地ノミ	○		○	種別	第一	第二	第三		
	○	○	○	○	○	○				種別	第一	第二	第三		
										種別	第一	第二	第三		

五三

裏面白紙

3 前項二項ノ計畫ノ實施ハ作戦資材ノ充當意ノ如クナラサルト對上  
 陸軍作戦ニ關スル新史實資料ノ收集及國內ヲ觀場トスル作戦指導  
 等ノ研究不十分ナルトニ基因シ其ノ進捗ハ著シク遅延セリ  
 昭和十九年末頃ニ於ケル案據計畫ニ對スル進捗程度左ノ如シ

東部軍	八戸平地	10%	伊豆群島	60%
	藤原平地	SA 平地ノ一部		
中部軍	豊橋平地	10%	高地附近	15%
		和歌山附近		
四部軍	宮崎平地	40%	大隅、薩摩半島	50%
			中西群島	25%

一 海軍トノ關係

第五章 海軍及隣接各軍トノ關係

陸海軍ノ日本本土ニ於ケル防衛分擔概ネ左ノ如シ

陸軍 主トシテ日本本土陸域（鎮守府又ハ警備隊所在地ヲ除ク）ニ於ケル防衛擔任

海軍 主トシテ日本本土海面（鎮守府又ハ警備隊所在地ノ陸地ヲ含ム）ニ於ケル防衛擔任

防衛總司令部ト海軍トノ關係ハ緊密ニシテ特ニ太平洋方面ノ情報ハ

一ニ海軍ノ通報ニ依存シ概ネ其ノ目的ヲ達セリ

防空警報ノ發令解除ハ相互ノ協定ニ依リ之ヲ實施ス

二隣接各軍トノ關係

支那派遣軍、朝鮮軍、第五方面軍、第八方面軍トハ防空情報ノ交換追尾以對、相互飛行機使用等ニ關シ協同シ有效ニ之ヲ利用セリ

第六章 警備

國內ノ治安維持ハ内務大臣ノ所管ナリ、軍ノ警備ハ之ヲ後據トナリ又軍自體ノ行動ヲ擁護スルヲ目的トスルモノニシテ各軍ハ戰時警備計畫

令ニ基キ警備計畫ヲ立案ス 戰時警備ハ戰時警備下令ニ依リ之レヲ實施スル如クナリアリ全期ヲ通シ國內ノ狀態ハ一般ニ平穩ニシテ警備上

特ニ憂慮スベキ事象ナク空襲時大火災ニ際シ諸種ノ應急復舊、救援作業、其ノ他混亂防止等ノ爲メ軍隊ノ出動ヲ必要トセリ

之ヲ爲メ戰時警備ノ下令ナキモ防空警報ノ發令ニ際シ軍隊ハ所要ノ出動準備ヲ整へ空襲時必要ニ應シ出動シ其ノ任ニ就ケリ 昭和十九年春

以來空襲ノ規模逐次大トナルニ從ヒ京滬、阪神、北九州、名古屋等ノ主要都市ニ於テハ空襲ニ際シ軍隊出動シテ被害地ノ秩序維持、復舊作

業等ニ協力セリ

警備部隊ハ特ニ之レヲ設クルコトナク各軍司令官其ノ管區内ニ於テ當時使用シ得ル所在ノ軍隊、學校ヲ以テ之レニ充ツ此ノ外防衛召集ヲ警

備部隊ニモ適用シ特ニ主要都市ニ於ケル警備力ヲ増強セリ

「サイパン」失陥後米軍ノ本土進攻企圖判斷セラレ空襲亦激化スルニ

從ヒ昭和十九年夏全國ニ亘リ戰時警備ヲ下令セララル然レトモ軍隊ノ配



定 表

機	燈	關	砲	聽	要	十九年十一月		十九年十二月		中隊數	機	燈	關	砲	聽	要
						頃	增加	頃	增加							
一	一	一	一	一	一	三	九	三	九	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一
十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二
十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三
十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四
十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五
十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六
十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七
十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八
十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九
二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十

摘 要

一、取敢へズ要地防空部隊及  
要地防空部隊ノ一部  
ヲ以テ左記ノ如ク飛  
行場ノ掩護ヲ準備ス  
越ヶ谷、船橋、八  
街、水戸、所澤、  
鉦子(以上AA)  
下志津、鉢田、東  
金、印旛、佐原(以  
上HA)

二、一列車高射砲中隊ヲ  
準備ス

一、取敢へズ要地防空部隊  
ノ一部ヲ以テ左記  
ノ如ク飛行場ノ掩護  
ヲ準備ス  
明野、小牧、清洲、  
老津(以上MA)

二、一列車高射砲中隊ヲ  
準備ス

一、取敢へズ要地防空部隊  
ノ一部ヲ以テ左記  
ノ如ク飛行場ノ掩護  
ヲ準備ス  
大刀洗(第一、福岡、  
熊本(以上AA))  
高江、大刀洗(第二)、  
目達原、芦屋、小  
月(以上MA)

二、一列車高射砲中隊ヲ  
準備ス

一、取敢へズ要地防空部隊  
ノ一部ヲ以テ左記  
ノ如ク飛行場ノ掩護  
ヲ準備ス  
河川、濟洲島(以上  
AA)

二、一列車高射砲中隊ヲ  
準備ス

(砲) 八六 三	五			三	二	(砲) 一九 一									二	二	(砲) 一五 一	(砲) 二三 一					(砲) 一七 一六	(砲) 三九 一												
六																								六												
(砲) 九六 三	五			三	二	(砲) 一九 一										二	(砲) 一五 一	(砲) 二五 一					(砲) 一九 一六	(砲) 四七 二												
(回) 一九 四	(回) 一			(回) 一	(回) 一	(回) 一六 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三					(回) 二 一	(回) 四 二	(回) 六 一					(回) 四 一	(回) 二 一	(回) 六 四	(回) 一 四	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一		
(回) 一九 四	(回) 一			(回) 一	(回) 一	(回) 一六 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三					(回) 二 一	(回) 四 二	(回) 六 一					(回) 四 一	(回) 二 一	(回) 六 四	(回) 一 四	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一		
(回) 二 三	(回) 一			(回) 一	(回) 一	(回) 一六 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三	(回) 一 三					(回) 二 一	(回) 四 二	(回) 六 一					(回) 四 一	(回) 二 一	(回) 六 四	(回) 一 四	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一	(回) 一 一		
七	一			一		二										二							四													
二						一										一									一											

一、取敢へズ要地防空部隊ノ一部ヲ以テ左記ノ如ク飛行場ノ掩護ヲ準備ス  
 金、印旛、佐原(以上MA)

二、一列車高射砲中隊ヲ準備ス  
 二、一列車高射砲中隊ヲ準備ス  
 三、一列車高射砲中隊ヲ準備ス  
 明野、小牧、清洲、老津(以上MA)

一、取敢へズ要地防空部隊ノ一部ヲ以テ左記ノ如ク飛行場ノ掩護ヲ準備ス  
 大刀洗(第二、福岡)、熊本(以上MA)  
 高江、大刀洗(第二)、目達原、芦屋、小月(以上MA)

二、一列車高射砲中隊ヲ準備ス

一、取敢へズ要地防空部隊ノ一部ヲ以テ左記ノ如ク飛行場ノ掩護ヲ準備ス  
 泗川、濟洲島(以上MA)  
 三、一列車高射砲中隊ヲ準備ス

二十耗九十門、ケキ十組、三十七耗十二門



CC BY-NC-SA  
AMSTL-2

別紙第一其ノ二

明	軍部						西						中						東						軍要			大要			
	計	石垣島	宮古島	伊江島	徳之島	那覇	大牟田	福岡	廣島	長崎	倉橋	計	廣畑	明石	各務原	阪神	名古屋	計	新島	八丈島	宇都宮	釜石	日立	太田	立川	京濱	中隊數		十月末	十九年	
(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
七	二	三	三	一			二	四	六	二	四	六	二	〇	二	一					一	一	二	二	二	二	八	四			
	12									12							24									24					
12	20							8		12			2																		
12	52									52			70			52	18	162						12	150						
4	174		6			12	4	8	16	28	100	186	6	4	6	114	56	364			4	6	12		342						
													6				6	18								18					
																		18						6	6						
	12									12			6				6	42								42					
12	20								8		12		2																		
12	52									52			70			52	18	180			6			18	156						
4	186		6			12	4	8	16	28	112	186	6	4	6	114	56	370		6		4	6	12		342					
28	270		6			12	4	8	16	36	188	264	6	4	6	168	80	592		6	6	4	12	18	540						
(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
七	二	三	三	一			二	四	六	二	四	六	二	一				九			一	一	二	三	二	八					

高射部隊主要配置

一、大要地ノ戦力ヲ益々充實強化ス  
二、情勢ニ伴フ航空基地ノ掩護ニ遺憾ナカラシム

高射  
十九年十月末砲數  
十九年十一月末砲數  
年度末頃砲數  
年度末頃砲數

軍要分

考	備	合計	軍			朝			部				西			部				中			軍					
			計	麗水	兼(平)浦(兼)二(義)	京(倉)城(川)	釜山	計	石垣島	官古島	伊江島	徳之島	那覇	大牟田	福岡	廣島	長崎	倉幡	計	廣畑	明石	各務原	阪神	名古屋	計	新島	八丈島	宇都宮
		六三〇	一四六	一	四二	七二							二	四	六	二六	二〇	一	一	一	二六	二一	二二	八				
		36														12												
		34	12			12									8	12	2				2							
		302	18			6	12									52	70				52	18						
		786	62	4	28	26	4	174		6			12	4	8	16	28	100	186	6	4	6	114	56	364			
		24																6					6					
		18																									6	
		18						12									12										6	
		60						12									12	6					6				42	
		34	12			12		30								8	12	2			2							
		320	18			6	12	52									52	70			52	18					6	
		804	62	4	28	26	4	186		6			12	4	8	16	28	112	186	6	4	6	114	56	370	6		
		1218	92	4	28	32	28	270		6			12	4	8	16	36	188	264	6	4	6	168	80	592	6	6	
		六八〇	一四六	一	四一	二五	七	二五三		一					二	四	六	二六	二二	一	二六	二二	二六	九				

一、情勢ニ應ジ一部ノ變更ヲ豫期ス  
 二、本表ニ示ス 11/19 3/20 期間ノ増加火砲（燈敷）ノ基準左ノ如シ  
 十二高二四門、八高十八門、七高十八門、照空燈二米六燈 一、五〇米六十燈、機關砲  
 三、高射砲中(ハ)八四門(ハ)六門編成中隊ヲ機關砲中(ハ)六門(ハ)九門編成ヲ示ス  
 四、本表中砲種別火砲數ハ一部豫定數ヲ含ム  
 五、電波標定機ノ配置ハ別ニ計盍ス

